

万葉集にみる氷見地方におけるフジ、ツمامの生態とその考察

本多啓七

今から約1250年前の氷見地方には広い布勢の水海があり、その周辺には多くのフジが繁茂している。国守大伴家持はよくフジ見物の遊覧を行って多くの歌詩を残している。また各種の方言名を歌詩にあげているが、この氷見の洪谿の崎に繁茂しているツمامの植物方言名も難解の一つとされている。このことについては各種の立場をあげてその結果から新しい解釈内容を発表する。

A. フジの生態と布勢の水海のフジ遊覧

1. フジの生態特性

1). マメ科の特性

フジはマメ科に属するがこのマメ科は種子植物の中でキク科、ラン科について大きな科である。これはキク科、ラン科等と同じく地球上の多様な環境によく適応した植物群であって特に乾燥地で多様な種に分化している。この理由は①根粒菌と共生し空中窒素を養分に利用したこと、②裸地に先駆植物として定着することが容易となったこと、③種子が発達して環境の変化や乾燥に強くなったこと、④莢の発達によって散布力が強まったことなどが特性としてあげられる。

2). フジの特性

(1). フジは巻きつき型蔓性木本で茎の形成層はある年代を経るとその動きを止め、新形成層を何回も繰り返すので機械的組織の発達が悪いが反面拘引力が強固となってくる。

(2). 強光を浴びる場合は宿主に絡みついて上昇するが弱光の場合は地表を匍匐する。

(3). フジは日当たりがよくやや湿潤な土質に適している。

(4). フジの花房は長く下垂し、花色は薄紫色であるが中には白色のものもある。

(5). フジの種類では日本産—ノダフジ、ヤマフ

ジ、中国産—シナフジ、北米産—アメリカフジ、ホナガアメリカフジの五種があり、氷見はノダフジ。

2. 布勢水海の水海遊覧

1). 布勢の水海の広さ

奈良時代ではこの布勢の水海は遠く二上山の山麓まで広がって砂州の発達により海の一部が閉鎖して生じた海跡湖である。湖畔には乎敷の崎、垂姫の崎、多枯の浦、多枯の島などの屈曲の多い潟であったため素晴らしい風景が展開していた。

大伴家持の一行は、この布勢の円山へ幾度も登り、布勢の水海の景色を嘆賞した。現在はこの布勢神社に「大伴家持郷遊覧之地」の古碑と「大伴家持郷頌徳碑」がある。この境内の裏手には家持を祀る御影社があり、全国でも珍しい。

2). フジ観賞遊覧

大伴家持は山国育ちの奈良都から来た歌友を春のフジ花頃に布勢の水海に招待して在任中四回もフジ観賞を行って多くの歌詩を残している。特に藤波、挿頭す、ホトトギスなどがあげられている。例えば「多枯の浦の底さへにほふ藤波を挿頭して行かむ見ぬ人のため」十九の4200、「藤波の繁りは過ぎぬあしひきの山雀公鳥などか来鳴かぬ」十九の4210などがあげられている。

(1) 藤波—フジの花房が風に靡く様を波に見たてた語

(2) 挿頭す—植物の生命力を感得し繁栄を願う行為

(3) 雀公鳥—藤との組合せによる発想の類型化

3. フジの分化

1). フジの語源

古代ではフジをフチ(布知、布遲)といい、語源は「吹き散る」からとのことである。

2). 日本人好みの花

サクラ花が散ると次はフジ花の時季となるが古

代生活は次の如く固く結ばれている。

(1)古事記—「藤の花衣伝説」、これ以前からも日常生活は次の如く固く結ばれている。①藤布—庶民着用、貴族は喪服、②各種の結束用、③紫色の花房—観賞用などがあげられる。

(2)万葉集—フジの歌詩が28首、当時は庭に栽植
(3)源氏物語—藤花の宴は平安時代の藤原家で全盛

(4)枕草子—松によりかかる藤を芽出度きとする。

(5)藤の花紋—優美な文模様の性格、藤原家の家紋が有名である

(6)江戸時代—各地にフジの名所が出現

(7)フジ信仰—花の精が出現、フジの老樹の畏敬

①謡曲の藤—多湖ノ浦の精による舞いを現出

②藤の神木—全国4件の中、富山県内 2件—黒部市八心大市比古神社境内、氷見市藤波神社境内、県外 広島県厳島神社境内、新潟県井栗村。

現在、藤の県指定は入善町の神社2件のみ。

B. ツمامの自然環境とその方言名考察

1. ツمام記載の万葉集原文

季春3月9日(天平勝宝2年)出擧の政(まつりごと)として舊江の村に行く。道の上にして物花を属目する詠、并せて興中に作る所の歌
洪谿の崎に過り、巖の上の樹を見る歌一首(樹の名はつまま)

「磯の上のつままを見れば 根を延へて 年深からし 神さびにけり」十八の4159

1)季春—晩春 3月の異名 2)出擧—古代は春、官稲を貸し秋、収穫後に利子をつけて返済させる制度。奈良時代では財政政策の一つとして制度化し国庫増収を計った。3)物花—季節の景色、この題詞は4165までの七首にまたがる大見出し。

2. 大伴家持のツمام発想後の題詞考察

1)世間の常無きを悲む歌一首—4160、4161、4162、
2)かねて作れる七夕の歌一首—4163、
3)勇士の名を振るはむことを慕ふ歌一首—4164、4165、

4)上の二首は、山上憶良の臣の作れる歌に追ひて和ふる。

以上の題詞から考察されることは、父大伴旅人

が太宰府の長官となった際、家持も同伴し年令は11才であった。当時「山柿の門」といわれていた宮廷歌人の山部赤人、柿本人麻呂以外の一人として筑前国守山上憶良はこの任地太宰府にあって歌人の造観世音寺別当の沙弥満誓や小弐の小野老と共に歌人の長官を大いに歓迎していた。この時若年の家持は西辺の太宰府にあって父旅人の薫育されながら政治家あるいは歌人としての重大さを体験することが出来た。一方山上憶良は遣唐師の一人として渡唐したがその後は漢文的色彩の濃い大陸的教養と謹直な性格が解け合って、人間性に富んだ道徳的あるいは思想的な内容を含んだ長歌や漢文などの特色があった。彼の作風は第5巻の雑歌「世の中は空しきものと・・・」(793)の仏教的思想、子等を思う歌「衆生平等と子等の愛着」(802~803)と「七夕の歌12集」(1517~1529)は左大臣長屋の王や太宰府の大伴旅人の邸など。「沈痾自哀文」は重病の折、学殖の深さを自負しながら栄達の道を熱望した歌詩。家持は若年の頃から憶良の性格と歌道の感化を受けた結果、仏教的無情観や七夕の見方が彼とよく類似し、さらに栄達を熱望した心情をさす歌を詠んでいる。

3. 松田修氏の「つまま」に関する考察

1). 後世の歌集4首は形式的で実感はなく「つまま」は当時歌人の間で興味の対象となっていた。

2). 未詳としている文献—「萬葉集第匠記」「萬葉集古義品物解」「萬葉集名物考」「萬葉集植物考」「萬葉集品類抄」などがある。

3). 畔田伴存の「古名録」—磯ムマベ(ハマヒサカキ)、温暖地方の海岸に自生、しかし北国に生育せずとのこと。但し日本海側沿岸の以西に存在。

4). 「皇方物産誌」—タブノキ(下段に記載)

5). 「樹種名方言集」(昭和七年版農林省山林局)—一般にタブ、(1)富山県—アホダマ、(2)石川、富山、島根—タビ、(3)石川加賀地方、福井越前地方、鳥取因幡地方、静岡伊豆、三重、兵庫、宮崎—タモ、(4)鳥取岩見—ダモ

以上の語源—タブ、タビ、タモ、タミ、ダモの名は同一系統と考察される。

アホダマのダマはダモから転訛したものか。

現在において判定資料も乏しく、タブ—名イヌ

グスとツママの語の関連も明らかでないので、イヌグスと断定するのもどうかと思う。

松田修氏は後程「都萬麻開眼」で江波熙氏の「古語事典」でツマを探究し最後にタブノキをツママと呼んでいる植物方言に家持が興味をひいたのであろうと考察している。

6). 本瀬晴雄氏のタブノキ名称考察

日本海側の富山県以西はダモ系統、同じく以東はモチノキ系統、南方地方はタブ系統である。但し富山県内の朝日町は中間系統でモチタマノキと呼んでいる。

7). その他の考証

(1)「國史昆蟲草木攷」—マツ、万葉集にはマツの歌詩が77首、特にマツを「待つ」の縁起木が多く、幸運と長寿を祈願。

(2)「万葉古今動植正名」—タブノキ、上に記載。

(3)白井光太郎氏のイヌツゲ説—ツゲ(つげ科)とイヌツゲ(もちのき科)は同じ常緑低木であるが前者は上古より黄楊櫛として使用、葉は対生、後者はツゲのにせ物として犬が付く、戦国時代の山城では矢の防備のため栽植したのでヤドメの別名がある。葉は互生、適応性がつよく枝条が多い。

4. 古代「榊」の種類

常緑広葉樹をサカキと総称し、榊の国字をあてる。このサカキの神の鎮まる聖地を杜と呼んだ。

○白花を伴う常緑広葉樹

種名	花期	樹形
(1) サカキ (つばき科)	6~7月 葉腋に白花点在一大	高木
(2) ヒサカキ (つばき科)	3~4月 葉腋に白花束生一小	小高木
(3) オガタマノキ (もくれん科)	2~4月 葉腋白花点在一大	高木
(4) シキミ (もくれん科)	3~4月 葉腋淡黄白花点在一中	小高木
(5) カナメモチ (ばら科)	5~6月 枝の先端付近白花一小	小高木
(6) マサキ (にしきぎ科)	6~7月 枝の先端付近緑白花一小	小高木

以上の花は純白が多く現在も慶事、弔事ともに白衣を着用する風習がある。また古代には白化の雉を献上したのでこの瑞祥によって白雉と改元したこともある。神霊を迎える榊の常緑と白花の関係は今後の大きい研究課題と思われる。

5. 富山県海辺岩塊上樹木の考察

下記の一覧表の通りで次の特徴があげられる。

- 1). これらの樹木は凡て常緑広葉樹である。
- 2). 出擧の折大伴家持が浪溪崎の景色を眺めた時季は三月九日で、これを太陽暦に換算すると四月末頃となる。
- 3). これに該当する花期はヒサカキのみ
- 4). この時代は寒冷期で一般に大雪の傾向があった。

○海岸に生育する常緑広葉樹

種名	花期	樹形
(1) トラベ (とべら科)	4月~6月 芳香のある白花	小高木
(2) ツゲ (つげ科)	3月~4月 枝先、葉腋黄小花	小高木
(3) イヌツゲ (もちのき科)	6月~7月 葉腋、小白花	小高木
(4) ヒサカキ (つばき科)	3月~4月 葉腋、小白花束生	小高木
(5) マルバジャリン パイ(ばら科)	5月 枝先、白花大花	小高木
(6) タブノキ (くすのき科)	5月~6月 枝先、黄色の小花	高木
(7) ヤブニッケイ (くすのき科)	6月~7月 葉腋、黄色の小花	高木

6. ツママのヒサカキ説

このヒサカキがツママである理由として次の五項目をあげて、ヒサカキ説を強調するものである。

- 1). 都万麻の語源—都は津で船着き場、つまり海岸を意味し、万麻は御飯の「うまい」の幼児語がママ、或はマンマに転訛したと考察される。
- 2). ママ、またはマンマを富山県、石川県、新潟県では御飯を昔はこの様に呼んでいた。
- 3). ヒサカキの花季は葉腋に白花が束生し、あた

かもママが一面に付着した状態をこの土地の人が直感的に述べた土語と思われる。

- 4). 現在ではこのヒサカキをシラカケノキと呼んでいるがこれはカジの繊維の白柺をヒサカキにかけて神の降臨を願ったと解される。またシラカケノキのシラカケは崖を意味する。生態的には崖に生育するのでこの意味も含まれていると思われる。
- 5). これに類似するハマヒサカキは当方に分布していないが能登でこの植樹を見た。日本海沿岸の石川県、福井県などの所在を明確にする必要があると思われる。

以上氷見に分布したフジとツママについて述べたが特にツママに関して小牧旌先生をはじめ諸先生方や各種機関の職員方のご指導に対し厚く御礼申し上げます。

参 考 文 献

濱 健夫, 1930. 植物形態額講話. 杏林舎.
 牧野富太郎, 1955. 牧野日本植物図鑑. 北隆館.
 武田祐吉校註, 1956. 万葉集(上・下). 角川書店.
 氷見市史編集委員会, 1963. 氷見市史. 氷見市役所.
 松田修, 1970. 増訂万葉植物考 示. 思想社.
 小川由一, 1973. 紀伊植物詩(一). 鮮明. 紀伊植物詩

刊行会.
 刊行会編, 1975. 日本国語大事典. 小学館.
 柳田国男, 1975. 先祖の話. 筑摩書房.
 上原敬二, 1976. 樹木大図譜(Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ). 有明書房.
 野間省一, 1980. 講談社園芸大百科事典(2). 講談社.
 小島憲之他校註訳, 1987. 万葉集(1、2、3、4). 小学館.
 斎藤正彦, 1987. 森と文化(東大教養講座). 東大出版社.
 小牧旌, 1987. 加賀能登の植物図譜. 刊行会.
 木村陽二郎, 1988. 草木辞苑. 柏書房.
 佐々木高明他, 1988. 畑作文化の誕生. 日本放送出版協会.
 麓次郎, 1988. 四季の花事典. 八坂書房.
 暦の会, 1989. 暦の百科事典. 新人物往来社.
 広瀬誠, 1990. 万葉集—漲るいのち. 国民文化研究会.
 本多啓七, 1990. 食糧植物と文化植物. 富山県生物学会.
 吉本健一, 1991. 方言雑語, ふるさとの文化を育む会.
 本多啓七, 1991. 里山植生の変遷と将来. 富山県生物学会.
 黒部市史編纂委員会, 1992. 黒部市史. 黒部市.
 本多啓七, 1994. 万葉集から見た大伴家持の時代. 性格、自然観の考察. 越中史壇会.
 (1994年12月25日受理)